

An abstract artwork featuring a complex composition of layered textures and colors. The background is a deep blue, overlaid with large, irregular patches of vibrant red and dark green. Interspersed within these colors are areas of gold and brown, some of which appear to be made of fine, fibrous or woven materials, giving the piece a tactile quality. The overall effect is one of dynamic energy and rich visual detail.

暮鳥・拓次・恭次郎

みやま文庫

暮鳥・拓次・恭次郎

みやま文庫

会 長 清 水 一 郎（群馬県知事）

副 会 長 山 川 武 正（群馬県教育長）

同 相 葉 伸（群馬大学名誉教授）

運営委員長 後 藤 喜 九 雄（群馬県議会議員）

編集委員長 萩 原 進（県史編さん委員）

事務局長 関 俊 治（県立図書館長）

目次

三人の詩人誕生の背景……………関
俊治……………1

口 表

絵 紙

肖 木
像 村

(写真) 仁

山村暮鳥

ふるさとと暮鳥……………志村弘之……………11

離郷―その生の軌跡……………和田義昭……………41

青森から東京へ……………41

青春の伝道……………46

仙台基督教会とボードレール……………50

光　　芒　　瞭　　然……………52

黎明会の結成……………60

伝道師休職……………66

晩　　年……………69

暮　　鳥　　の　　詩……………関　　俊　　治……………72

はじめに	72
------	----

1 象徴詩からの出発	74
------------	----

2 『自然と印象』から『三人の処女』へ	79
---------------------	----

3 『聖三稜玻璃』の時代	88
--------------	----

4 『雲』へいたる道程	97
-------------	----

山村暮鳥年譜	107
--------	-----

参考文献	111
------	-----

大手 拓次

拓次・恋と生涯	113
---------	-----

桜井作次

生立ち	113
-----	-----

少年愛	117
-----	-----

大学時代	121
------	-----

ライオン広告部時代……………127

発病以後……………141

拓次の性格と作品……………松井好夫……………146

拓次の詩……………野口武久……………168

詩人登場の背景—その詩論—……………168

『藍色の墓』を中心に……………172

大手拓次年譜……………197

参考文献……………201

萩原恭次郎

私と恭次郎……………東宮七男……………203

一	その山ながめて……………	203
二	宿縁……………	211
三	芸術革命……………	216
四	谷……………	229
	『キツネノス』から『死刑宣告』まで……………	232
	川浦三四郎……………	

一出	発……………	232
二	投書時代……………	237
三	『新生』……………	247
四	『現代詩歌』……………	248
五	『炬火』……………	254
六	『赤と黒』……………	261
七	『死刑宣告』……………	272
八	それから……………	279

恭次郎の詩……………	289
梁瀬和男……………	

萩原恭次郎年譜	323
---------	-----

参考文献	329
------	-----

あとがき	
------	--

三人の詩人誕生の背景

——まえがきに代えて——

関 俊 治

1

文学者が育ってゆく土壌というものは、もちろん、いちがいにはとらえにくい。彼の生れ育った環境やその時代の文学思潮も影響するだろうし、先行する優れた作品によって触発されるかもしれない。また、何よりも、彼自身の素質が、それを大きく左右するだろうからだ。しかし、個々の文学者の経歴をたどってみるとき、彼が、どのような文学の系列や集団に属したか、というようなことが、あんがい、彼の文学者としての道を決定づけているのに気がつく。ということは、その作家の個性や創造力は、彼の属した集団の中で光を当てられ、元気づけられ、お互いに刺激しあいながら成長してゆくものだからである。

このことは、過去でも現在でも変りはない。とくに明治以降においては、硯友社、白樺、アラ

ラギ、明星、ホトトギス等、さまざまな文学集団が派生し、そこからたくさんの小説家、詩人、歌人、俳人が誕生した。そして、これらの集団も時がたつにつれて、その内部事情や時代の風潮の中で、烈しい消長をくりかえし、そこからまた、さまざまな流派が発生する。

これらの流派は、もともと文学者の集団であるから、当然、その主張や作品の発表機関である雑誌（機関紙）を刊行した。そこにはまた、文学志望の青年のために投稿欄が設けられ、この投稿欄は、同時に新人の登龍門でもあった。明治の中ごろから、このような投稿欄をもった雑誌がさかんに刊行されるようになり、なかには、文学好きの少年や青年のための投書専門の雑誌さえ、数多く生れるようになった。そして、これらの投稿欄や投書雑誌から、多くの著名な詩人、作家等が果立った。同人雑誌というようなものが、まだあまり生れていなかった明治大正期では、文学者の大半は、このようにして育っていったのである。このことは、明治、大正における文学活動の大きな特長とも言えるものであった。

本書においてとりあげられた群馬県出身の三人の詩人、山村暮鳥、大手拓次、萩原恭次郎は、こうした時代的背景の中で詩人となった。ほぼ同時代に生きた同郷の詩人、平井晩村も、そして萩原朔太郎も、やはり、この三人と異なるところはない。もう一つ、彼らに共通するところは、明治詩壇の主流であり、かつ近代詩の窓を開いたといわれる浪漫主義がしだいに衰頹に向い、口語を基調とする自由詩がそれまでの新体詩調の韻律詩にとって変ろうとする時期に詩人となったと

いうことである。それはとりもなおさず、大正期にはじまる現代詩の潮流とも重なり合う時期でもあり、かつ、才能ある新人にとっては、その才能を発揮できる格好の舞台でもあった。

暮鳥、拓次、恭次郎と並べた場合、同じ郷土に生を享けながら、これほど相互に異質に見える詩人はいないだろう。朔太郎の場合は、この三人とは、生前の交わりからいっても、また作品の上からみても、なにかしらかかり合うものが見うけられるのだが、三人だけに限ってみると、おたがいにかかり合うことはほとんどなかった、と断言してさしつかえないだろう。にも拘らず、彼らは、まったく無縁だったわけではない。むしろ、明治から大正にかけての、さまざまな文学集団のはげしい消長の中で、どこかしらで、触れ合う時期もあったのである。おたがいになんか意識していたかどうかは、別として――。

ちなみに、三人の詩人の生きた時代と比較するため、その生没年と年齢を掲げてみる。

山村 暮鳥	一八八四（明治17）	生――一九二四（大正13）	没 41才
大手 拓次	一八八七（明治20）	生――一九三四（昭和9）	没 47才
萩原恭次郎	一八九九（明治32）	生――一九三八（昭和13）	没 39才

また、彼らが名を挙げるにいたった詩集の刊行年月とそのときの年齢は、つぎのとおりである。

暮鳥『聖三稜玻璃』 一九一五・一二（大正4） 33才

拓次『藍色の墓』 一九三六・一二（昭和11） 没後

恭次郎『死刑宣告』 一九二五・一〇（大正14） 26才

2

明治二十年代の終りごろから、前に記したような投書を主とした文芸誌の刊行がさかんになる。その中の代表的なものは、『文庫』と『新声』である。どちらも、その投書家の中から、多くの著名な文学者を生んでいるが、とくに明治二十八年に創刊された『文庫』は、詩の選者に河井醉茗がいて、数多くの若い有能な詩人を輩出させた。たとえば、平井晩村、有本芳水、北原白秋、川路柳虹、三木露風、人見東明、加藤介春等であった。このうち晩村と芳水は近代詩でも特異な道を歩むことになるが、白秋、柳虹、露風、東明、介春の五人は、明治末期から大正にかけての近代詩の転換期に当って、つねに新しい詩の運動の先頭に立った人たちである。と同時に、山村暮鳥、大手拓次、萩原恭次郎の三詩人が、詩壇に登場してゆく過程の中で、その決定的な導き手となった人たちでもある。

一方、与謝野鉄幹のおこした東京新詩社の機関紙『明星』は『文庫』のような投書を主とした

雑誌ではないが、清新にして奔放なロマンチズムが全国の青少年を魅了し、多くの愛読者と投稿家を生み、そこから多彩な文学者を生むに至った。詩人だけに限って言えば、相馬御風、前田林外、岩野泡鳴、高村光太郎、石川啄木、木下李太郎、北原白秋などである。前橋中学校に在学中の萩原朔太郎は、美・悼[・]という号で短歌を投稿し、鉄幹から、啄木と並んで有望な新進歌人として認められたことは、よく知られているところである。「明星」は明治三十三年に創刊され、明治四十一年に廃刊となる。廃刊の原因となったのは、北原白秋や木下李太郎、吉井勇らがそろって脱退し、パンの会を結成したためといわれる。

明治三十六年、「明星」の新詩社を脱退した前田林外、相馬御風、岩野泡鳴は、新たに『白百合』を創刊する。「明星」のゆき方にあきたらずに、それに対抗するかたちで始められたわけだが、雑誌の内容や体裁ともに「明星」のロマンチズムをほとんど踏襲したものであった。この『白百合』に、山村暮鳥は、木暮流星という筆名で、明治三十七年二月から同三十九年十二月までの、ちょうど三か年にわたって短歌を発表する。終りごろには、毎月十五首、十七首と掲載されるようになり、三十九年十月号には三十一首が一挙に掲載された。この点からみても、暮鳥は間接的にはあるが明星のロマンチズムの洗霊を受けたことがわかる。おなじころ暮鳥は、蒲原有明、三木露風と知るようになる。

その蒲原有明が詩の選者をしていた『文章世界』に、暮鳥の詩二篇がはじめて掲載されるのは、

明治四十年十二月号である。それは、暮鳥の実質上の詩人としての出発でもあった。それからは二年後、暮鳥は自由詩社の同人となり、その機関紙『自然と印象』に詩を発表することにより、本格的に詩壇に足をふみ入れることになる。この自由詩社は、前記の『文庫』から育った人見東明、加藤介春らがはじめた自然主義を標榜する詩派であった。やがて間もなく、暮鳥は、三木露風、北原白秋からも詩風を吸収し、彼の前半期の前衛的な詩を生み出してゆくのである。

3

白秋、李太郎らのつくったパンの会は雑誌『スバル』を創刊、そこに頽廢と耽美をこめたエキゾチズムの世界をつくり出す。そのかたわら、白秋は、彼みずから主宰して『朱戀』^{ザンボ}という雑誌をはじめ。明治四十四年十一月の創刊である。そこには、白秋の芸術家としての感覚が思う存分發揮され、また多彩な執筆者が毎号を飾った。とくに萩原朔太郎、室生犀星、山村暮鳥、大手拓次の四人は、新鮮で個性的な作品を発表して、新人として注目されつつあった。

それにもまして、白秋の洞察力がこれらの詩人の個性の伸長させたのは『地上巡礼』という雑誌であった。これも白秋の主宰により、大正三年九月から翌年三月までに六冊が刊行された。続いて白秋は『アルス』を創刊し、これもわずか四号で終ったが、いずれも、朔太郎、暮鳥、拓次、

犀星は常連の寄稿者であり、しかも、そこに発表された作品のほとんどは、後にこれらの詩人の名を決定づける作品となった。

暮鳥と拓次という、あまりにもかけはなれた資質の詩人が、この時期に、同じ雑誌に作品を発表し合ったということは、大正初期の現代詩形成期なるがゆえに、けっして特異な現象ではないのだが、それはまた同時に、この二人の詩人のふれ合いを、偶然の邂逅として見のがしてしまうべき問題ではないように思われる。

のちに朔太郎、犀星がつくった『感情』に、暮鳥は、はじめ積極的に参加するが、途中でぶつりとその関係を断ってしまう。それから急速に人道主義的詩風に傾いてゆくのである。同様に拓次は、『感情』には訳詩をのせた程度で、これにふみこむ姿勢はみせなかった。それどころか、拓次は、白秋からすすめられたとき以外には、ほとんど作品を発表することをせず、詩壇とは没交渉の世界に沈潜してゆく。だから、暮鳥と拓次との共通点といえば、大正初期のある時期に、白秋を媒介者として、ほんの僅かな期間結ばれ、やがては、朔太郎・犀星という一つの軸をはさんで、まったく対象的な詩の世界へ向ってしまった、ということにあるであろう。

さて、本書でとりあげられた三番目の詩人、萩原恭次郎は、意外にも、その詩人形成期に、山村暮鳥と深くかかり合っている。

大正期にはいると、少年対象の投書雑誌がいっそうさかんになり、恭次郎は、そのいくつかの

常連であった。はやくから短歌と詩をはじめた彼は、前橋中学校在学中のころ既に『文章世界』、『秀才文壇』などに投書して採用されている。『文章世界』といえば、暮鳥の初期詩篇が掲載された雑誌である。暮鳥のときからは十年たつて、こんどは同郷の恭次郎が同じ雑誌に投書したことになる。また、恭次郎が在学中つくった『新生』という雑誌に、暮鳥は詩を寄せており、また暮鳥が大正七年十月に創刊した『苦惱者』という雑誌は、若い恭次郎を感動させたといわれる。こうして、恭次郎が暮鳥と知り合ったのは、暮鳥がもっともヒューマンな詩活動を展開した時期であり、恭次郎自身の、その後のダイナミックな詩活動を生み出す一つの要素ともなったと思われる。しかし、恭次郎を詩壇において最も推輓してくれたのは、ほかならぬ川路柳虹であった。彼は柳虹の主宰した『現代詩歌』でいち早く認められ、その後身である『炬火』の時代をふくめて、それは、彼の青年期の詩活動のもっとも烈しく燃焼させた時代でもあった。

4

群馬県というところは、北から南へかけて、ちょうど県を真二つにするように利根川が流れている。大半山岳に占められた狭い県にもかかわらず、その利根川を境にして生活圈、文化圏が異なるような考え方をすることが多い。利根、吾妻の二郡を一括して北毛と言う場合があるように、